

# 別所沼のヒアシンスハウス 2004年に有志が再現

## 立原道造 夢の家 文化交流 着実に



ヒアシンスハウスの前で見学者に解説する北原代表(右)。ポールに掲げた三角旗は「在宅を知らせるために」と立原が構想していたものだ。さいたま市南区

さいたま市南区の別所沼のほとりにひっそりと建つ木造の小屋「風信子荘(ヒアシンスハウス)」。天逝した詩人立原道造(1914-1999)が設計した別荘だ。生前にその夢はかなわなかったが、没後に有志が建設。文化交流の場として地域に貢献してきたその功績をたたえ、運営する立原ファンらでつくる「ヒアシンスの会」が表彰されることになった。

立原は建築家としても将来を期待されていた。当時、別所沼近くには敬愛する先輩詩人の神保光太郎や画家の須田勉太ら多くの芸術家が住んでおり、彼らを週末に招く別荘を建てる夢を抱いていた。「埼玉縣浦和市外六辻村別所ヒアシンスハウス」と住所を記した名刺まで作るほどだった。

だが立原は計画途中の24歳、肺結核で没した。残された別荘のスケッチ数十点を手がかりに「市民の手で実現しよう」と建築家や文芸家らが立ち上がり、募金で集めた600万円、没後65年となる2004年、

### 運営団体を表彰

忠実に再現された。地元の立原ファンらでつくるヒアシンスの会のメンバーらがボランティアで運営を引き受け、芸術家らの作品展示や交流会などに利用してきた。毎年秋には「ヒアシンスハウス夢まつり」と銘打って芸術家の講演や朗読、音楽会を開催。今年も11日に近くの別所沼会館で、ロープアクト造形作家吉田佑子さんの講演などを予定している。

秋晴れの日、詩人が夢みた別荘を訪ねた。十字がくりぬかれた雨戸を開けると、大窓からたつぷりと陽光が差し込む。5坪(約16・5平方メートル)足らずのワンルームで明かりは電球が一つ。食卓と椅子に小さなベッドが整然と並ぶ。こぢんまりとしながらも開放感があり、居心地がいい。

この日は、「留学生の校外学習の下見に」と、早稲田大学日本語教育研究センターの講師、森下雅子さんが訪れていた。「閑静な沼のほとりで風が心地よい。こんな書斎からなら、ステキな詩がもっと生まれていったことでしょう。留学生にも知ってほしい空間ですね」

ヒアシンスの会の功績をたたえ、14日の県民の日に、彩の国コミュニティ協議会のシラコバト賞が贈られる。北原立木代表(81)は「芸術家村だったかつての別所沼のように、新たな文化の発信基地として根付かせていきたい」と語る。

開室日は水曜と土日祝日の午前10時〜午後3時。問い合わせは北原さん(048・863・4474)。

(進藤健二)

### 天声人語

〈夢みたものは ひとつの幸福 ねがったものは ひとつの愛〉。昭和のはじめの詩人、立原道造は、建築家としても将来を嘱望されていた。東京帝大の建築学科で優秀な成績をおさめた。夢みたのは、自身が週末を過ごす小さな家だった▼候補地は、今のさいたま市南区内の沼のほとりに見つけた。「風信子荘」と名づけ、設計図を何枚も書き残した。だが夢は実現できぬまま、結核を患って生涯を閉じる。24歳だった▼多くの人々が詩人の夢を忘れてしまったころ、さいたま市に住む文学者や建築家たちが立ち上がった。残された設計図をもとに市民からの寄付で家を建てた。2004年のことである▼「酔狂と言われればそれまでですが、立原の夢をどうしても実らせてあげたかった」。作家の北原立木さん(81)はそう話す。沼の近くに住み、「ヒアシンスハウスの会」の代表を務める。先日、北原さんの案内で家の中に入った。5坪足らずのワンルーム。台所はない。簡素なつくりのベッドと机があるばかりだが、スギ材の木目に囲まれていると、不思議と息が深くなる▼完成から15年、のべ2万人超が訪れた。最近では若者も多い。詩を愛する人、建築家を目指す人。「立原の夢が未来に広がっていくようです」と、北原さんは喜ぶ▼家の角には大きな窓があった。開け放つとヒヨドリがさえずり、水辺を吹きわたる爽やかな風がほおをなでた。詩の一つでも口ずさみたくなるほど心地よい。今年29日は80回目の風信子忌である。

